

マザリナード・プロジェクトの挑戦

——古文書研究の新しい地平線をめざして

一丸 禎子

はじめに

「マザリナード・プロジェクト」とは何を指すのか

マザリナード・プロジェクトとは、東京大学所蔵『マザリナード集成』約 2700 点のデジタル化を出発点として、現存する約 5000 種類のマザリナード文書をインターネット上で閲覧できるようにする計画である。

このプロジェクトは、2006 年に筆者が『マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション』（博士学位取得論文）のなかで提案したマザリナード文書研究の新しいアプローチ方法に基づいている。17 世紀に印刷出版された古文書であるマザリナード文書を完全デジタル化することにより、資料体としての様態を刷新し、同時にこれまでの研究成果に加えて最新の学術的知見を蓄積していく。言いかえるなら、デジタル化したマザリナード文書を中心に、インターネット上で絶えず更新される研究用プラットフォームを構築しようという試みである¹⁾。

1) 『マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション』2006 年、東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻・学位取得論文。全 5 巻、1140 ページ。博論は文献調査結果が 5 分の 4 を占める。プロジェクト内容の詳細と学術的背景は「マザリナード・プロジェクト——人文科学研究の新しいコーパスを考察する」（学習院大学人文科学研究所紀要『人文』7 号、2008 年、pp. 87-106）に詳しくまとめているのであわせてご参照いただき

プロジェクトのこれまでの経過

このプロジェクトの実質的開始は、2007年、上記博論が提出された翌年にパトリック・レボラルによりインターネット上に最初のドメイン <http://www.mazarinades.net/blog/> が確保され、この論文を基本構想として公表することにより着手された²⁾。

マザリナード・プロジェクトは以後、パトリック・レボラル（南山大学）と一丸禎子（学習院大学）が中心になり、日本とフランスの複数の共同研究者との連携・交流を通じ、基本構想をより発展的にかつ具体的に実現していくことになる。同時に、マザリナード文書を所有する複数の機関とも協力体制を強化してゆくことになる³⁾。

まず初めに2008年、最初の科学研究費補助金により、東京大学所蔵コレクション『マザリナード集成』全44巻が既存のマイクロフィルムからデジタル画像化された⁴⁾。これによって3万4000枚以上のデジタル画像を文書ごとに切り出し、「画像」として閲覧することが可能になり、コレクション本体のみならず、30年前の購入時に撮影され劣化の危険にさらされていたマイクロフィルム15巻の画像も保存し、また撮影時に取りこぼしていたページを補完して完全なものとすることができた。

つぎに2010年から2013年にかけて、今度は大がかりな作業に取り組むことになる。すべてのページをデジタル画像から文字に転写し、語彙検索の可能な言語コーパスとして構築するためである⁵⁾。アルファベットにし

たい。

- 2) 「マザリナード国際共同研究サイト」と名づけられたこのドメインにはプロジェクトの経過を記録している。本プロジェクトの学術的透明性を担保するためである。
- 3) 本プロジェクトは共同研究者だけでなく、多くの人に支えられている。とりわけ学習院大学事務の支援がなければ、私たちは前に進むことができなかった。すべての方のお名前をここにあげることはできないが、そうした支援にこの場を借りてお礼を申しあげたい。
- 4) 平成20年度採択研究課題「マザリナード文書のデジタル化：次世代型コーパスの構築」：研究代表者・学習院大学・一丸禎子（課題番号20903010）。
- 5) 平成22-25年度採択研究課題「マザリナード文書の電子化：次世代型コーパスの構築と新しい研究環境に関する総合的研究」研究代表者：南山大学・レボラル・パトリック（課題

て約 5000 万字を手作業で文字テキストに書き起こし、それぞれの文書のタイトル、著者名、印刷業者名、印刷地、発行年、ページ数などの文献情報をすべて手入力した。総単語数約 700 万、概算で 13 万 7000 種類の単語からなるこのオンライン・コーパスは 2011 年からインターネット上で公開されている。17 世紀の言語コーパスとして最も大きいもののひとつである。そして誰でも自由に語彙検索機能を使って閲覧できる。重要なのは、こうしてデジタル化されたマザリナード文書に入っていく「入口」が仮想空間につくられたことである。

この入口はすべての人に開かれている。しかし、さらにもうひとつ、このコーパスには登録された研究者のみが入れる扉も用意されている。そこではテキストの校訂作業を行う。マザリナード文書を「画像」、「原文そのままの綴りのテキスト」、「現代語の綴りに変換したテキスト」の三つの状態で同時に表示し、註解をつけることができる。いいかえれば研究者の作業場へつながっているのだ。

こうして 4 年がかりで私たちが実現した電子コーパス <http://www.mazarinades.org/> は、デジタル化されたマザリナード文書の最大の集合であり、かつ研究用プラットフォームとして開かれているインターネット上唯一の学術サイトである。

国際的評価

マザリナード・プロジェクトは、ひとことで言うなら、日本から発信されたマザリナード研究への新しいアプローチである。そしていくつかの点で、これまで不可能と考えられたことを可能にするものである。のちに詳述するが、これまで研究者がマザリナード文書を資料体として選んだときに、その熱意にもかかわらず、乗り越えがたい困難として立ちはだかる問題が二つあった。それは文書の「量が多いこと」、しかも「世界中に分散

している」ことである。わたしたちはまずこの資料体の性質に由来する問題を仮想空間へ移行することによって解決に導こうとしている。

それだけでなく、マザリナード・プロジェクトは資料を支持体の紙から解放することにより、ほとんど未開に近い研究領域を私たちの前に出現させる。さらにそこで得られる学術的成果を即時に共有し蓄積していく場所を提供する。このプロジェクトは新しいアプローチにとどまらず、新たな古文書研究の方法論を実験するものでもある。

近年、古文書のデジタル化はめざましく発達してきた。それは貴重な文書を保護する目的もある。だが、マザリナード・プロジェクトが目指すのはそれだけでなく、支持体をインターネットに移し替えることによって、古文書研究を活性化することである。古文書のデジタル化には解決すべき課題がたくさんある。情報を扱う技術のみならず、公開にともなう文書の権利関係、研究成果の保護、知的財産を侵害する盗用や無断使用の防止等々…。ほかにも実際に学術サイトを運営していく中で遭遇する未知の問題がある。それらを解決しながら、インターネット上で新しい知見を集積しつつ、研究者はどのように共同し、連帯し、知の最前線を拡大していくのか。マザリナード・プロジェクトが最終的に目指すのは、古文書研究における新しい学術共同体のあり方なのである⁶⁾。

この究極の目標について、私たちは2010年以降、国内、海外の研究者や図書館などに呼びかけてきた。特に、マザリナード文書のコレクションを私たちのプロジェクトがデジタル化し公開することを快諾してくれた東京大学総合図書館、緊密な連携を約束したフランス国立マザリーヌ図書館、私たちの研究グループとの相互協力を文書で合意してくれたボルドー市立図書館、17世紀の印刷業者をはじめ本に関する専門知識を提供してくれているフランス国立図書館（BnF）との提携の状態を見ると、本プロジェ

6) 平成26-28年度採択研究課題「マザリナード文書の電子化——古文書研究とデジタル環境の親和性に関する総合研究」研究代表者：学習院大学・一丸禎子（課題番号26370364）。

クトへの理解と認知はそれなりに深まっていると言ってよいだろう。

じっさい、私たちは2015年6月、フランス学士院の後援を受け、マザリーヌ図書館、フランス国立図書館（BnF、アルスナル図書館）と共同で国際シンポジウム『Mazarinades : nouvelles approches』（マザリナード文書：新しいアプローチ）を開催するに至った。マザリナード研究史において新しい時代の始まりを告げるこの国際学会は6月10日から3日間開かれた。各国から参加した31名の発表者が展開したテーマは多様であるのみならず同時に学術的価値の高いものであった。それは今後、この領域に期待しうる豊かな収穫を予見させるものである⁷⁾。

さらに来年、2016年には、東京大学総合図書館、駒場博物館と共同でマザリナード展を開催する予定である。この展覧会は日本で初めて行われるマザリナード文書の展示で、フランス側からはマザリーヌ図書館、フランス国立図書館（BnF）、アルスナル図書館の資料提供を受ける。支持体を紙からインターネットに移したとしても、印刷された本物が価値を失うわけではない。実際にはその逆である。マザリナード・プロジェクトの仕事を可視化するためにも、現実世界でマザリナード文書を直接「見る」ことはひじょうに重要である。

この展覧会に合わせフランスからの4名の専門研究者を招いて国際シンポジウムも行われる。私たちはこの機会に海外の研究者といっしょにアクセスの難しい古文書を見る体験を多くの人と共有したいと考えている。それはこのように成長したマザリナード・プロジェクトが成果を国民に還元することにもなるからである。

7) 発表者の国別内訳は、フランス、ドイツ、イタリア、デンマーク、ベルギー、オランダ、アメリカ、アブダビ首長国。発表応募者数は70名を超え、運営委員会とは別に組織された学術評定委員会によって査読後、協議によって選定された。英国、ポーランドからの発表予定者が査読を通過しながら急病で辞退されたのはたいへん残念である。日本からの発表者は松村剛（東京大学）、エリック・アヴォカ（京都大学）、パトリック・レボラル（南山大学）、一丸禎子（学習院大学）の4名。プログラム等詳細は以下のURLにある。<http://www.bibliotheque-mazarine.fr/fr/evenements/actualites/mazarinades-nouvelles-approches-colloque-international/>

マザリナード・プロジェクトの今後の方針

6月のパリにおける国際シンポジウムで明らかになったのだが、デンマーク国立図書館では進行中のマザリナード・コレクションの整理・分類に、私たちのサイトが独自に提案した分類法を採用したようだ。また、聴衆のひとりであったスイスの大学院生は博論のテーマにマザリナード文書を選び、スイスにおける文献調査の結果を私たちのサイトにフィードバックしてくれるようになった。私たちの仕事がマザリナード研究それ自体を新しい展開に向かって推進しているのなら、これ以上の喜びはない。ならば構想からおよそ10年の区切りである今、これまでを振り返って検証し、今後の課題を整理する必要があるだろう。進むべき方向を間違えて研究を後退させるようなことがあってはならない。この10年に私たちが何を可能にし、次の課題として何に挑戦していくのか。それを考えるべき節目にマザリナード・プロジェクトは置かれているのである。

I. コーパス（資料体）としてのマザリナード文書

マザリナード文書とは

マザリナード文書 *Les Mazarinades* とは、フランスの絶対王政が確立する前夜に起きた内乱、フロンドの乱（1648–1653）の時期に印刷されたり手書きで流通した政治文書の総体である⁸⁾。

当時、国王ルイ14世（1638–1715）は未成年であり、王母アンヌ・ド

8) フランス語では個々の文書を小文字で *mazarinade* と書き、文書を総体として示すときには複数定冠詞をつけ、大文字で *les Mazarinades* と表記する。本論のマザリナード文書に関する知識は多くをユベール・キャリエによる以下の著作に依拠している。著者は、筆者の博論の大部を占める東京大学コレクションの文献調査における協力者である。すでにお亡くなりになっているが、この場を借り、あらためて感謝を述べたい。Hubert Carrier, *La Presse de la Fronde (1648–1653) : Les Mazarinades. La Conquête de l'opinion*, Genève, Librairie Droz, 1989. *La Presse de la Fronde (1648–1653) : Les Mazarinades. Les Hommes du livre*, Genève, Librairie Droz, 1991.

ートリッシュ（1601-1666）を摂政とし、宰相マザラン（1602-1661）が権力を握っていた。ヨーロッパは宗教改革以来の新旧教徒の対立がつついていたが、ウエストファリア条約（1648年）によってようやく30年戦争に終止符が打たれようとしていた。しかし、フランスとハプスブルグ家との緊張関係は継続しており、宮廷はつねに戦費調達のために迫られていた。そのためさまざまな形で増税が行われていた。これに反対する法官たちへの締めつけが直接の引き金となり、高等法院が宮廷に反旗を翻したことによって内乱に発展した。一方で、国王を頂点とする中央集権化に不満をもつ封建諸侯らが混乱に乗じて宰相マザランを排し、権力を奪おうとする。フロンドの乱の前半はパリ高等法院を中心とする反乱だが、後半は大貴族が中心となりフランス全土におよぶ内戦状態になった⁹⁾。

「マザリナード」という呼称は、この混乱のさなか、矢面に立った宰相マザランの名に由来する（Mazarin→mazarinade）。これが、のちに反マザランだけでなく、フロンドの乱のあいだに流通したさまざまな文書の総称となった。およそ5000~6000種類の文書が現在まで保存されているといわれる。内容もじつに多様で、高等法院裁決から、国王の手紙、マザラン批判のきわめて攻撃的文書、戦況報告、パリの食糧難を嘆く文書、貼り紙、建白書、他の文書の注解、果ては料理のレシピまである。いいかえるなら、マザリナード文書とはフロンドの乱の際のあらゆる発言の集合である¹⁰⁾。

9) フロンドの乱に関しては、Hubert Méthivier, *La Fronde*, Paris, PUF, 1984 ; Orest Ranum, *La Fronde*, Paris, Seuil, 1995 ; Pierre Goubert, *Mazarin*, Paris, Fayard, 1990.

10) マザリナード文書の大半は匿名の書き手によるものだ。しかし、なかには文学史に名前を残す文人も多く含まれる。『回想録』で有名なレ枢機卿、『箴言集』の「太陽も死もじっと見つめられない」という言葉で知られる大貴族ラ・ロシュフーコー、『ロマン・コミック』を書いて笑いを振りまき、その妻が晩年のルイ14世と秘密結婚することになるスカロン、エドモン・ロスタンの小説の主人公になったシラノ・ド・ベルジュラック、サン・タマン、サラザン、それから当時大流行だったビュルレスクという滑稽な風刺詩のジャンルに秀でた多くの詩人たち。筆頭親王家のコンデ大公は敵方を攻撃するために人を雇ってせつせと誹謗文書を書かせていた。マザリナード文書は文芸と政治の場が交差する特異な点である。また、あらゆる階層の言葉、方言、俚語、俗語が動員されている。

それが「世論の形成」にどのようにかわるのかについては議論の余地があるが、少なくともこれらの文書が出版され、あるいは手書きで回覧されたのは、「誰かに読ませる」ためである。特に印刷術の利用は、不特定多数の読み手に働きかけることを想定している。その意味でマザリナード文書は「言葉」であると同時に「行為」である。ただし、真実の歴史的証言として扱うには、やや疑いがある。なぜなら、これらの文書は人を動かすために嘘をつくこともあるからだ¹¹⁾。

現存するマザリナード文書の物理的特徴 1——《量》

フランスの歴史において、騒乱の時期に大量の文書が流通した例は三つある。ひとつは16世紀の宗教戦争、つぎに17世紀のフロンドの乱の5年間、そして18世紀末のフランス革命である。これまでの研究によっても、今日まで残っているマザリナード文書はおおよそ5000～6000種類と近似値でしか示せないのは、印刷物のみならず手書きで流通したものを数にいかどうか、あるいはのちに問題として取り上げるが、「何をもって真正のマザリナードと認定するか」等によって数が異なってくるからである。

しかも、種類ではなく「現存する総数」となると、いったいどれほどの量が残っているのか、誰も数えたことがないだろうし、おそらく誰にも正解はだせない。なぜなら、マザリナード文書は、フランスのみならず、世界各地にコレクションとして分散しているからだ。世界で最も大きなコレクションをもつマザリーヌ図書館では20,000～25,000点あるといわれる¹²⁾。ここでも正確な数字が表示されないのは、未整理・未分類のまま

11) 紙数の関係でここでは紹介できないが、マザリナード文書の内容については前掲博論『マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション』第二部 第3章 東京大学総合図書館蔵コレクションの記述 II. 各コレクションの由来と特徴、pp. 117-161に特徴的な文書を例としてあげている。あわせて参考にされたい。

12) マザリーヌ図書館コレクションの由来、規模については以下のURLを参照。<http://www.bibliotheque-mazarine.fr/fr/collections/fonds-particuliers/mazarinades> マザリーヌ図書館では参考文献としてマザリナード・プロジェクトの電子コーパスと研究ブログにリンクが張られている。

保管されている文書が多数あるからだ。フランス国立図書館にも、アルスナル図書館にも大きなコレクションがあり、ボルドーのような反乱の中心になった都市はもとより、フランス各地の図書館や古文書館でも保存している。フランス以外では、ドイツ、イギリス、アメリカ、ロシア、ヴァチカン市国などが大型コレクションを有する。2000点を超える東京大学『マザリナード集成』は間違いなくアジアで最も大きなコレクションだ。これらをすべて数えあげるのは物理的に不可能であり、「マザリナード文書は膨大な量が各地にコレクションとして残っている」としか言いようがない。研究者をくじけさせる最大の問題はこの「量」にある。資料体としてのマザリナード文書、それは無限に広がる言葉の海なのだ。

現存するマザリナード文書の物理的特徴2——《分散》

ところで、一口に約5000～6000種類といっても、それは1枚だけの張り紙の場合もあれば、4～8ページの小冊子になっていることもある。だが、中には数百ページを超えるものもあるのだ。ひとつひとつの文書がバラバラに保管されている場合もあれば、合本し装丁されていることもある。たとえば、東京大学の『マザリナード集成』の場合、5つの下位コレクションのうち4つ（A～D）がそれぞれ合本された9巻、20巻、12巻、2巻からなっている（Eは未装丁、桐箱入り1個）¹³⁾。

今日までマザリナード文書が残っているのは、これらの文書を蒐集したコレクターのおかげなのだが、それが研究者にとっては超えられない障壁ともなっているのだ。マザリナード文書は、コレクションとしてあらゆるところに「分散」している。フランス国内のみならず、海外にも散っている。しかも、個人所蔵で公開されていないものもある。どれほど熱い学術

13) これらの由来を異にする5つのコレクションは1978年に東京大学が丸善を通してオランダの書籍商デッカー&ノルデマンから購入する以前には世界的に有名な愛書家であったミシェル・ベルンシュタインのもとにあったと推定される。由来については、拙稿「マザリナード文書の公開に先立って——その特性と東京大学コレクションの紹介」学習院大学人文科学研究所紀要『人文』9号、2010年、pp. 97-118に詳しく紹介している。

的探究心をもってしても、5000を超えるといわれるマザリナード文書を総体として一度に見渡すことは、誰にとっても物理的に不可能なのだ。

さて、「量」と「分散」というマザリナード文書特有の物理的性質がいかに研究者の接近を阻むものであるかは、20世紀に記念碑的な研究成果を残したふたりの研究者のうちのひとり、クリスチャン・ジュオーの告白を見れば明らかだ。「全部（のマザリナード文書）を完璧に分析しつくすのに、人の一生で足りるかどうか、私には見当もつかない。」¹⁴⁾

II. インターネット空間への移行

マザリナード・プロジェクトの最初の仕事——《量》と《分散》の問題を解決する

マザリナード文書が提示するふたつの物理的難題——「量」と「分散」——は紙を支持体とする3次元空間からネット上の仮想空間へ移行させることによってほとんど解決することができる。

1991年、インターネットの登場により大量の文書を仮想空間に蓄積することが可能になった。1990年代前半には、早くもフランスの研究者たちがさまざまな文学テキストのデータベース化に乗り出している。1997年には、フランス国立図書館（BnF）が率先して、デジタル化したテキストを電子図書館として一般に公開する計画 Gallica（ガリカ・プロジェクト）に着手した。マザリナード・プロジェクトの着想はこうした時代の変化のなかで得られたものである¹⁵⁾。

14) Christian Jouhaud, *Mazarinades, la Fronde des mots*, Paris, Aubier, 1985, p. 17. ただし、ジュオーがほぼ不可能であるとした「全部を完璧に分析しつくす」ことに挑戦したのがユベール・キャリエによる前掲書である。この著作はフロンドの乱とマザリナード文書との関係性を、出版事情、流通経路、著者、購買者等多様な視点から網羅的に分析考察している。この著作の中で、キャリエは次の課題として、マザリナード文書の総目録化を予告しているが、残念ながら未発表のまま没している。マザリナード・プロジェクトは目録化においてキャリエの遺した次の課題を引き継ぐものである。

インターネットは大量の情報を保管することに適している。同時に物理的に遠く離れていてもアクセスできる。それだけでなく古文書研究にとって、仮想空間での閲覧は文書を物理的劣化から保護することにもなるのだ。400年近く前のマザリナード文書を資料体として甦らせるのにこれほど最適な環境はない。問題は、どのような手順でマザリナード文書を仮想空間に移行させるかである。

インターネット環境への適応、あるいは非物質化の手順

2008年にわたしが東京大学『マザリナード集成』をマイクロフィルムから画像データ化する作業に着手した時点で、Web上に公開されていたマザリナード文書はフランス・ドルドーニュ県のホームページで紹介されている画像28点だけだった¹⁶⁾。画像データであっても、文字を読むことはできる。東京大学コレクション『マザリナード集成』の約2700点の画像データもパソコンの画面上で読めるようになったが、それはドルドーニュ県のホームページ同様、アルバムの写真のようにめくりながら見ていく状態に近い。資料体として利用するには、画像からさらに「テキストに入

15) マザリナード文書をインターネット上で公開するため方法を考えるにあたって、複数のサイトの方法論を参考にした。代表的な例は『TLF 辞典』編集のために作られたデータベース Frantext、『ボヴァリー夫人』の草稿をはじめとし、作家の伝記的事実から写真資料、研究論文、外国語翻訳などフロベール研究を網羅するルーアン大学の「ボヴァリー・プロジェクト」、文学史上もっとも長いといわれる13,095ページに及ぶ17世紀のバロック小説『アルタメヌス、あるいはル・グラン・シリユスの物語』の校定版を5つのフォーマットで公開したスイスの補助金による「アルタメヌス・プロジェクト」などである。1997年のBnFによるガリカ・プロジェクトを境に変化する環境も含め、前掲論文「マザリナード・プロジェクト——人文科学研究の新しいコーパスを考察する」(pp. 89-96)に詳しく紹介しているので、あわせて参考にされたい。

16) ちなみに2008年9月30日の時点で「mazarinade」でヒットするGoogle検索結果は、16,600件だった。そのほとんどはマザリナード文書への言及か図書館の文献情報である。しかし、BnFの電子図書館 Gallica にはすでにいくつかのマザリナード文書が含まれていた。ただしそれらは「テーマ」で検索しても出てこない。「タイトル」で検索すると12点見つかるが、それでもシラノ・ド・ベルジュラックの *Le ministre d'état flambé en vers burlesque* (1649年) は、マザリナード文書として有名であっても、著者名が正確なタイトルがわかっていなければ検索できなかった。前掲論文「マザリナード・プロジェクト——人文科学研究の新しいコーパスを考察する」p. 100。

っていくこと」ができるようにしなければならない。インターネット環境への適応はこの「テキストに入っていくための入口」が必要なのである。

1. 画像からテキストへの変換

マザリナード文書は17世紀に流通した紙媒体のテキストである。検閲によって政治的に過激な内容や誹謗中傷のはなはだしいものは処罰の対象になったので、ものによっては深夜、隠れて印刷されることもあった。粗悪な紙や質の悪いインクが使われた場合、劣化してたいへん読みにくくなっている。したがって、マイクロフィルムから起こした画像をOCR（光学文字認識技術）にかけて自動的に文字テキストに変換することができない。そこで手作業で転写することになった。このテキストへの転写にあたって、私たちは「原本どおり」に正確に写し取ることにした¹⁷⁾。

この転写作業の際に、同時にタイトルと東京大学総合図書館のつけた各文書の分類番号をタグとしてデータに加え、XML形式ファイルで保存した。こうしておけば、既存の文献管理ソフトをカスタマイズして使い、タイトルと図書館分類番号でそれぞれの文書の検索が可能になる。これで目的のテキストを開いて読むことができる。タイトルと分類番号がこのコーパスに最初につけられた原初的な「入口」、最初のインターフェースとして機能する。

2. 文献情報からの検索

マザリナード文書は出版物であるという点で、図書館の本と変わらない。タイトル、著者名、印刷業者名、出版地、出版年、ページ数など各文書の基本的文献情報をインデックス化すれば、さらに検索の選択肢が増える。

17) 現在のフランス国立図書館（BnF）における古文書、とりわけ目録に残すタイトルの転写は「原綴」が原則となっている。しかしながら、いくつかの古いテキストに見られる恣意的な表記で、そのまま写し取った場合に読みを混乱させるだけでしかないものもある。私たちのサイトでは本文中にそのような場合があった場合のみ、必要最低限の処理をすることにした。どのように処理したかはすべてサイトに注意書きとして残している。

これらの情報はあとから手入力でデータとして加える必要があった。デジタル・テキスト化したそれぞれの文書を開き、XML ファイルの中にあらかじめ準備してあったタグ（たとえば〈著者名〉など）にしたがって手作業で書き込んでいくのだ。こうすることで、各分野（タイトル、著者名、印刷業者名…）の一覧表をつくることや、あるいは文書ごとにすべての項目を一枚の図書カードのようにして一括表示することもできるようになる。テキストをデジタル化する場合、そこに「入っていく」ために入口をどうデザインするかというのは重要な課題である。

デジタル化によって失われるものと得るもの

東京大学所蔵『マザリナード集成』の原本は皮革装丁された43巻と桐箱入りの未装丁の文書からなる。そこにはテキストだけでなく、17世紀当時に刷られた多数の肖像画、装飾用版画、複数の蔵書印、手書きの書き込みや目次等が加わっており、それぞれの装丁にも特徴がある¹⁸⁾。これらの情報は由来や当時の紙や皮革や装丁の技術、あるいはコレクションの成立、受容の形態などに関して多くの重要な手がかりを与えるものだが、デジタル化したコーパスにはいっさい反映されない。一般に、ある本を「デジタル化する」というとき、それは紙媒体で古書を復元するような「複製」にはならない。そこにはかならず抜け落ちる情報がある。

フランス語ではこのようにデジタル化によって情報が抜け落ちることを *maigrir*（痩せる）という動詞で表現する。本をデジタル化する、いかにすれば非物質化する際に、避けては通れない問題である。どのようにしてこの「痩せる」現象を少なくするかが研究者どうしても議論になる。しかし、非物質化した段階で、それは原本とは別の次元に移行するのだということを、私たちは忘れてはならない。

「デジタル化された本は、原本とは別物」なのである。それゆえ、デジ

18) 前掲論文「マザリナード文書の公開に先立って——その特性と東京大学コレクションの紹介」pp. 103-114

タル化したからといって、もう原本は参照しなくてもいいということにはならないし、またデジタル化したものは原本でないからあくまで参考にしかならないということにもならない。原本の価値と並行して、デジタル化したからこそ可能になるテキストへの接近がある。両者は各々別の次元で貴重な役割を果たすことになるのだ。

私たちは「本が痩せてしまうこと」を嘆くよりも、どんなことができるようになるのか、デジタル化による付加価値を追求すべきである。それではつぎに、デジタル化によって本プロジェクトが実現したマザリナード文書への新しいアプローチを具体的に挙げてみよう。

マザリナード文書のデジタル化によって得られたもの

【例1】3段階のテキストの表示と語彙検索

2010年から2013年にかけて、まずマザリナード・プロジェクトが実現したのは、各文書を「画像」、「文字テキスト」、さらに「現代語訳」の3種類で同時に表示することだ。

この3種類を表示する必要があるかどうかについては異論があり、2010年の日本フランス語フランス文学会でのワークショップ「マザリナード・プロジェクト：古文書研究の新しい地平線」では会場から賛否両論があった¹⁹⁾。否定的意見では、一般に公開するには、「現代語訳」だけを表示し、現代フランス語テキストでの検索で十分であるということであった。折りしも、フランスで17世紀の長編小説『アストレ』*L'Astrée* (5399ページ)の校定本がインターネット上で公開されようとしていたが、このサイトではテキストは完全に現代語綴りになおされている²⁰⁾。研究者のあい

19) 日本フランス語フランス文学会2010年度秋季大会、パネリスト：ミシェル・ベルナル（パリIII大学）、パトリック・レボラル（南山大学）、一丸禎子（学習院大学）、アラン・ジェヌテオ（ナンシー大学）。

だでは原典と註解作業の途中は見せる必要がないという意見が主流であった。この意見は現在も主流でありつづけている。

しかし、こうした反対意見があったにもかかわらず、また、あえて3種類のテキストを表示するための時間と労力を費やしてまで、私たちが3つのテキストの並列開示にこだわったのには、つぎのような理由がある。

私たちのサイトは一般に公開されている。と同時に、学術研究のプラットフォームになるために開かれている。劣化を避けつつ古文書の原典を参照するのが物理的にも難しい状況であるなら、なおさらのこと、原典の画像を公開する必要がある。なぜなら、現代語訳は「原テキスト」ではないからである。そこにはかならず校定者の「選択」や「解釈」が入ってくる。校訂にせよ註解にせよ、それを第三者が検証できるようにしておかねばならない。なぜなら第三者の検証があってこそ、その註解・校訂は学術的な価値が決定するからである。それにどれほど情報量が増えようとも、仮想空間である限り、それらを蓄積するのになんの不都合も生じない。テキストを現代語訳のみに限定し、原典やその転写テキストをあえて見せないだけの利点はないのである。

2011年から一般公開されたマザリナード・プロジェクト <http://www.mazarinades.org/> では、基本機能として、コーパス内の単語（あるいは複数の語の組み合わせ）による検索ができる。文字テキストは、テキスト・ディプロマティック、すなわち、原文に忠実に転写されたもので、当然、17世紀の文法と綴りになっている。しかし、「あいまい検索」も可能なので、かならずしも17世紀のフランス語を正しく理解していないと正確な結果を得られないわけではない²¹⁾。

これまでのところ現代語への翻訳はパリ III 大学のミシェル・ベルナールから提供された小さなプログラムによって綴りを単純に自動変換したも

20) <http://www.astree.paris-sorbonne.fr/index.php/>

21) <http://www.mazarinades.org/> 「オンライン・デジタル・コーパスの使用法について」

のである。ひとの目と手による校正が必要であり、また、17世紀特有の古い言い回しや語順をどこまで現代語に近づけるのかなど検討すべき課題もある。したがって、現代語訳テキストは語彙検索にまだ対応させていない。また研究者にしか公開されていない。不完全なテキストが流通してしまうことを避けるためである。作業が進めば公開される予定である。

少なくとも、この3種類のテキストを並置し、語彙検索機能を有効に使うなら、膨大な量のマザリナード文書をすべて読まなくても、この言葉の海から特定の文書を探し出すことはできる。

【例2】更新され続けるテキスト

マザリナード・プロジェクトのサイトは構造上、大きくふたつに分けられている。「一般に無条件で公開されている部分」と「専門家しか入れない部分」である。後者では研究者がテキストに注解をつけるなど、専門的な作業を進め、そこに蓄積された知見が前者に反映されるという仕組みだ。こうしてたえず新しい知見が加えられ更新される²²⁾。

1990年代からフランスの文学研究サイトでは、積極的に電子化したテキストの公開が行われてきた。2000年以降、その数は増えていくばかりだが、多くの場合、前述の『アストレ』のようにテキストは校定や註釈をつける作業を終えてから、決定版として公開される。ひとたび公開されれば、出版物のように大きな変更がない。しかし、それではインターネット上における環境を生かしきれない。「更新」という大きな利点をみすみす逃しているからだ。

22) この研究者の「作業場」に入るためには、サイトへの登録が必要である。匿名性を完全に排除し、学術的透明性を担保すると同時に知的財産の権利を保護するためである。登録者のIDを使って、未登録者がログインし情報を書き込んだとしてもダイレクトには表示されない。サイト管理は研究者倫理に基づいて、内容の検証だけでなく、他者の知的権利の侵害や盗用などに対しても厳しく監視されている。

マザリナード・プロジェクトではこの世に存在するすべてのマザリナード文書を仮想空間でひとつの集合にすることを目指している。量と分散を解消するためのこの作業がいつ終わるのか、誰にも予想できない。その意味で従来型の文学研究サイト、つまり研究成果を完了形で提示するコンテンツとは真逆の発想なのである。

私たちはテキストを集合させつつ、現代語への翻訳、テキストへの註解、その他さまざまな作業をつづけていく。いずれフロンドの乱とマザリナード文書に関連するものを、映画、音楽、絵画、演劇、小説等、ジャンルを問わずにアーカイヴ化していくことになる。この作業は、たとえていうなら、バルセロナにあるガウディの建築、サグラダ・ファミリアの建造に似ている。この壮大な教会建築は何世紀も完成されずに作業が続けられているのではなかったらうか。

【例3】学術研究用プラットフォームと研究者共同体

マザリナード・プロジェクトがテキストの公開と同様に大切だと考える基本理念は、このように「作業が続けられる」ということである。情報が蓄積され、たえず更新される学術研究用プラットフォームとして機能すること。そのため必然的に、この作業場を円滑に運営していく研究者コミュニティの存在が必要になってくる。この研究サイトの最終的な形は、将来、そのコミュニティによるプラットフォームの安定した維持管理・運営が実現したときに見えてくるはずである。

2015年6月のパリにおける国際シンポジウムは、インターネット上のこうしたマザリナード・プロジェクトの進行と連動して開かれた。シンポジウムと同時にマザリーヌ図書館とアルスナル図書館では文書の展示も行われた²³⁾。インターネット上での作業と同時にこうした「現実空間」に

23) アルスナル図書館ではシンポジウム会場になった1日だけの公開だったが、展示されたマザリナード文書は2016年東京での展覧会でもスライドとして見るができる。またマ

において研究者間の交流を組織し運営していくことも、私たちのプロジェクトの重要な課題である。仮想と現実のどちらかに偏ることなく、両方の利点を上手につかひながら、学問領域と国の垣根を超えて研究者の交流を活性化させていくこと。それこそが研究の発展につながると考えるからである。

III. マザリナード・プロジェクトの次の課題

東京大学コレクションの2700点を超すデジタル化されたマザリナード文書はインターネット上で公開されている最も大きなマザリナード文書の集合体である。かつ語彙検索が可能な言語コーパスであり、文献情報からの検索もできるデータベースでもある。研究者による利用も始まり、学術的プラットフォームとしても機能し始めた。さて、つぎに私たちには何ができるだろうか。

マザリナード・プロジェクトはデジタル化によって新しい研究領域を準備してきた。すべてのマザリナード文書が仮想空間で閲覧可能になるまで、この蒐集作業はつづけられていく。しかし無計画に文書の数を増やしていくわけではない。私たちはすでにその手順について考えている。そしてこの蒐集作業は必然的に私たちのプロジェクトをある根源的な問いに向き合わせる。「何をもって私たちはそれをマザリナード文書と呼ぶのか？」——すなわちマザリナード文書の定義へと向かわせるのだ。

マザリナード文書の定義：何をもって私たちはそれをマザリナード文書と呼ぶのか？

マザリナード文書は5000種類以上現存するというとき、この数字はつ

ザリーヌ図書館では『Mazarinades (1648-1653) : la Fronde, les mots, les presses』（マザリナード（1648-1653）—— フロンドの乱・言葉・出版）と題し、3か月間の展覧会として公開された（会期2015年6月11日—9月25日）。<http://www.bibliotheque-mazarine.fr/fr/evenements/expositions?id=2787:mazarinades-1648-1653-la-fronde-les-mots-les-presses>

ねに近似値である。現在のところマザリナード文書とは「マザリナード文書と呼ばれているもの」である。学術的にはきわめて不明瞭なのである。

なぜこうした状況が生まれたのか？ それはこの資料が学術的関心を引く前に、コレクターによって集められ、売買されてきたからである。

マザリナード文書の名付け親：コレクターたち

17世紀のフロンドの乱のさなかに、もうすでに同時代人がマザリナード文書のコレクションを始めていた²⁴⁾。マザリナード文書の内容はじつに多様である。王令や高等法院裁決のような公の刊行物もあれば、ひそかに回覧された誹謗文書もあり、道端で配られたプロパガンダの類もある。パリでは、ボン・ヌフの橋のあたりを中心に売られており、町の本屋が仲介することもあった。当時から危険な文書ほど人気が高かったようで、おなじテキストに何種類も版がある場合にはよく売れたということである²⁵⁾。

たとえば、マザリナード文書の語源になったとされるポール・スカロンのビュルレスク作品『ラ・マザリナード』*La Mazarinade* (1651年)は、東大コレクションに3種類の版があり、さらにマザリーヌ図書館の別の版と比べてみると、少なくとも8種類以上異なる版で印刷されていることがわかる²⁶⁾。

24) フロンドの乱にさかのぼるコレクションとしては、宰相マザランの司書であったガブリエル・ノーデ (1600-1653) が誹謗文書に反駁する目的で集めていた (歴史の皮肉というべきか、ノーデのコレクションがマザリーヌ図書館の核になっている)。ヴァチカンやドイツのウォルフエンビュッテル公爵のコレクションは外交的な関心から本国へ定期的に送られていた当時のパリの刊行物がもとになっている。Carrier, *La Conquête de l'opinion*, pp. 12-14.

25) 当時の資料によれば、たとえばディディエ・ロストなるパリの市民は、「マザリナードの通」で、過激できわどいものを探していた。1649年、印刷業者が逮捕されたり、死刑を宣告されるような文書を買ひ求め、それを売った書籍商ヴィヴネとともども逮捕されている。ロストが買った7つの危険文書は、ある貴族が人に頼んで買わせた文書とも一致し、「きわどい」文書は身分を問わず人気があったようである。Ibid., pp. 430-439. その7種類のうち6つは東大コレクションで読むことができる。前掲博論『マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション』pp. 172-173.

26) このスカロン作品に使用されている表現はきわめて過激であり、モローが『選集』を編

《mazarinade》という言葉は、じつはスカロン以前にも使用されていて、はじめはマザランの所業を揶揄する風刺詩を指していた²⁷⁾。これがいつの間にか、フロンドの乱の時期に刊行されたものを指すようになっていった。しかし、17～18世紀初期に装丁されたマザリナード文書には「Recueil de pièces」「Pièces du temps」など単に「文集」「当時の文書」程度の意味にしかない銘が打たれているところから、同時代人のコレクターにとっては、かならずしも最初から「《mazarinade》を集めている」という意識はなかったようである。こうしてコレクターたちが集めた「当時の文書」を事後遡及的に私たちは《mazarinade》と呼んでいるのである²⁸⁾。

マザリナード文書の目録：モローの『*Bibliographie des Mazarinades*』

蒐集の対象となった段階で、マザリナード文書の「同時代人の意識に影響を与える書き物」としての価値は急激に薄れ、《mazarinade》は古書市場の一角を形成するジャンル名として認識されるようになっていった。

古書市場の一商品となったマザリナード文書に決定的な影響を与えたのが19世紀半ばに登場するセレストン・モローによる『マザリナード書誌』*Bibliographie des Mazarinades* (1850-1851)である²⁹⁾。一般に「モローのカタログ」あるいは単に「モロー」と称されるこの著作は、各文書の文献情報はもとより出版の状況、他の文書との関連、独自の「評価」など

んだとき、著しく下品で猥褻と判断される多くの箇所を伏字にせざるをえなかった。Célestin Moreau, *Choix de Mazarinades*, New York, Johnson reprint, 1965, t. II, pp. 241-253. (Reprint de Paris, 1858.)

27) 実際にはスカロンより先にマリニーが短い詩のなかで mazarinade という単語を使用している。Carrier, *La Conquête de l'opinion*, p. 60. また、マザリーヌ図書館にはスカロンより早くタイトルに使用している文書がある。それでもスカロン作品が mazarinade をひとつの作品のジャンルとして独立させるきっかけになったと考えられる。前掲博論『マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション』pp. 162-167.

28) 語義の歴史的变化については、前掲博論、第二部第4章「《mazarinade》語義の変遷」で論じている。pp. 162-178.

29) Célestin Moreau, *Bibliographie des Mazarinades*, Société de l'Histoire de France, Paris, J. Renouard, 1850-1851, 3 vol.

解説も付されている。この書誌の出版が古書愛好家たちにおよぼした意識の変化は見過ごせない。まずそこに掲載された4607点こそが「正当なマザリナード文書」であるという認識、それからこの「カタログ」に掲載されたナンバーをすべて集めたいという強い動機づけである³⁰⁾。

意識の変革は行動の変化をもたらす。モローに記載された「正当なマザリナード文書」を全部集めたいという欲求は、希少価値の高い文書の値をつりあげ、市場が投機的になっていく。その欲求は、それまで「当時の文書」として、いわば緩いくくりで集められていたものを、場合によってはその美しい装丁を破壊してまで、その中の一点を求めるほどに強かった³¹⁾。たとえば、パリの北にあるシャンティイの城に残るオマール公爵のマザリナード文書コレクションは「つねにより完璧に近づける」ために、公爵はあえて装丁せず、自分のもっている文書よりも良い状態のものが市場に出れば入れ替えていた³²⁾。

その一方で、「モローのカタログに記載されていない」ことによりかえって価値を高める文書もあった。モロー自身が書誌の補遺を出版し、さらに他の编者による補遺が加わり、「マザリナード文書」はとめどなく数を増やしていくことになるのである³³⁾。

30) モローの『書誌』は4084タイトルだが、最終巻に補遺として230点に加えられているので4314タイトルのマザリナード文書が掲載されている。その後さらに *Bulletin du bibliophile* 誌上に掲載された第2、第3の補遺（1862年、1869年）を加えるとあわせて4607タイトルがいわゆる「モローのカタログに掲載されたマザリナード文書」である。（ただしの中には「実在しない文書」も入っている。回想録などで言及、引用されているがモローが実物を確認していない場合、★印がつけられている。）

31) たとえば東京大学『マザリナード集成』の桐箱Eには、おそらくそうしたコレクターの欲望の犠牲となって装丁を崩されたのであろう痕跡をとどめている文書が多数みつかるといえる。

32) 2010年に同図書館から受けた説明によれば、最後のシャンティイ城主であったオマール公duc d'Aumale, Henri d'Orléans (1822-1897) は鑑識眼の高い美術品コレクターとして知られ、モローと同時代人である。

33) 東京大学『マザリナード集成』にも、購入時に「モローの『目録』に記載されていない珍しいマザリナードが223点含まれている」と言われていた（東京大学図書館月報『図書館の窓』1979年7月号 pp. 80-81）。実際にはほとんどが勘違いなのだが、未掲載の文書を含むことがコレクションの価値を高めることに使われている例である。

モローの功罪

19世紀半ばにモローが初めて試みた各コレクションの枠組みを超えた「マザリナード文書の総合目録」は古書市場だけに影響を与えたわけではない。モローの仕事は研究史上においても前例のない大がかりな検証であり、モローが振り当てた分類番号は今日でも文書の識別に使用されている。この著作はマザリナード文書の調査には必須の参考文献であり、おそらくほとんどの図書館がモローの目録を参照している。

たとえば、マザリーヌ図書館のカタログは、19世紀末から20世紀の初めに司書であったアルマン・ダルトワ³⁴⁾が作成したもののだが、ダルトワはモローのカタログに紙を足しつつ、図書館が所蔵する文書の情報を書き加えていった。公開されているマザリナード文書の目録として、これ以上に豊かな情報源はない。

モローの書誌はいわばコレクターと学術研究の中間に位置する³⁵⁾。科学的記述の始まりとしては、それはまだ発端にすぎない。モローの仕事は当然、19世紀の社会や技術による制約を受けている。ここで簡単に現代の研究者から見たモローの問題点を整理するとつぎようになる。

1. モローの出版以降も、それに続く研究者が目録の増補を続けている。現実にマザリナード文書として流通しているものは、したがって、モローの分類番号よりずっと数が多い³⁶⁾。

34) Armand d'Artois (1845-1912)。2015年6月の国際シンポジウムで、マザリーヌ図書館のクリストフ・ヴェレ学芸員によるダルトワの伝記的事実に関する発表があった。Christophe Vellet, « Les mazarinades à l'affiche ? Armand d'Artois (1845-1912), dramaturge et catalogueur des mazarinades de la Bibliothèque Mazarine. » 研究史において重要な仕事をしたにもかかわらず、ダルトワについてはこれまで紹介されることがなかったのでここに記しておく。

35) モロー (1805-1888) はジャーナリストとしてスタートし、17世紀の回想録の編纂に携わり、フランス歴史学会 (SHF) の依頼を受けてマザリナードの書誌を作成した。マザリーヌ図書館には草稿、私信などが遺されている。http://www.bibliotheque-mazarine.fr/fr/collections/fonds-particuliers/celestine-moreau

36) ファン・デル・ハーゲンはモローの記述の誤りを訂正し、より正確にしようとした。訂正箇所は66箇所。手書き原稿の発見もいくつか含まれる。Philippe van der Haeghen, « Notes biographiques sur les Mazarinades de C. Moreau », *Bulletin du bibliophile belge*, vol. 15 (1859), pp. 384-395.

2. モローは「何をもってマザリナード文書」とするのか、定義を明確にせずに目録化した³⁷⁾。
3. モローが調査の対象としたコレクションはパリにあるコレクションが中心になっている。たとえばフロンドの乱で最後まで抵抗したボルドーなど、地方都市の出版物は網羅されていない。地方のマザリナード文書の調査が行われる必要がある。

キャリエの挑戦

先に引用したクリスチャン・ジュオーの発言「全部（のマザリナード文書）を完璧に分析しつくすのに、人の一生で足りるかどうか、私には見当もつかない」³⁸⁾からすれば、ほとんど不可能な計画に挑戦したのが、20世紀後半に出版されたユベール・キャリエの著作『フロンドの乱（1648-1653）の出版物：マザリナード文書』*La Presse de la Fronde (1648-1653) : Les Mazarinades*.（全2巻、1989-1991年）である³⁹⁾。988ページの国家博士論文は35年の文献調査の成果であり、フロンドの乱とマザリナード文書との関係性を、主要人物、党派、出来事について考証しながら、同時に当時の出版事情、流通経路、著者、購買者など多様な視点を導入しつつ、マザリナード文書と「世論」の形成をひとつの歴史的事実として記述したものである。モローの次にこの著作こそが、「マザリナード文書とは何か」に関して現在の私たちが得られる最も詳しい記述である。

エミール・ソカールはトロワ図書館のコレクションからモローにない80点の文書を加えることになった。Emile Socard, « Supplément à la Bibliographie des Mazarinades », Paris, H. Menu, 1876. (Extrait du *Cabinet historique*, t. XXII : Mazarinades de la Bibliothèque municipale de Troyes).

エルネスト・ラバディは特にボルドーでフロンドの乱に関わる文書346点を発見した。Ernest Labadie, « Nouveau Supplément à la Bibliographie des Mazarinades » (Extrait du *Bulletin du bibliophile* de 1903 et 1904), Paris, Henri Leclerc, 1904.

37) モローの『書誌』と『選集』の序文を比べてみると、いずれにも定義のようなものは書かれていない。

38) Jouhaud, *op. cit.*, p. 17.

39) Carrier, *op. cit.*, 2 vol.

この著作のなかで、キャリアエは「全マザリナード文書の歴史的・批評的目録」*Bibliographie historique et critique des Mazarinades* の出版を予告しているが、残念ながら刊行されていない。この新しい目録は上記の著作と同時に準備されていたもので、B4版の用紙にコピーされたマザリーヌ図書館のアルマン・ダルトワによるカタログ——それ自体がモローの書誌に加筆されたものであることはすでに述べたとおりであるが——そこにキャリアエ自身が手書きでさらに加筆訂正したものである⁴⁰⁾。

モロー、ダルトワ、それにつづくキャリアエによる記述の特徴はつぎのとおりである。

1. フランス国内だけでなく、海外のコレクションも含めて記述されている⁴¹⁾。
2. 貴重な文書はその希少性と同時に、どこに保管されているかも記録されている。図書館の場合には蔵書番号も一緒に記録されている。
3. 装丁の物理的特徴も記述されている。
4. 真正のマザリナードであるかどうかの鑑定も記述されている。

マザリーヌ図書館ではこの未刊行の目録を公開する準備をしているところだが、どのような形になるか未定である。それではこのキャリアエの目録が公開されれば、マザリナード文書の総合的記述はそれで完了するのかもしれない、そうはならない。なぜなら、キャリアエの仕事に対する批判もあり、反対の立場をとる研究者もいるからである。

40) キャリエはモローの欠点として、網羅性の欠如、記述の誤り（タイトルの写しちがひ、ページ数、出版年月日、印刷地の間違い）の他に、19世紀特有の歴史観、事項索引の欠如（キャリアエはこれがもっとも残念な不備であり専門家以外の接近を阻んでいるとする）を指摘しており、それらを訂正し、補って、これまでのすべての研究の成果を集成した新しいカタログを構想していた。Carrier, *La Conquête de l'opinion*, p. 27. 現在、この手書き原稿はマザリーヌ図書館に遺贈され非公開である。2015年のマザリーヌ図書館における展覧会では一部展示されている。

41) 2000点を超すコレクションはすべて文献調査の対象とされた。東京大学『マザリナード集成』の文献調査結果もそこに記述されている。

キャリエへの批判

ユベール・キャリエの仕事がマザリナード文書の研究史上、記念碑的著作となっていることは否定できない。この著作を参考にせずして、マザリナード文書を理解することはもはや不可能だ。多くの研究者がこれに依拠している。しかしながら、だからといって異論がないわけではない。とりわけマザリナード文書の定義に関しては議論の余地があるとされる。

キャリエは20世紀に入るまでマザリナード文書を定義しようという試みが真剣になされなかったことを指摘しつつ、きわめて厳格な条件を提示している⁴²⁾。要約すると、それはフロンドの乱（それも1648年5月13日最高法院連合裁定から1653年7月31日ボルドーの和平まで）の間に出版されていること（もしくは手書きで回覧されていること）。フロンドの乱に関与すること、とりわけこの内乱の世論の形成に関与するものであることだ。

この定義からすると、年代的条件でモローに記載されている文書のいくつかは排除されねばならない。キャリエにしたがえば、フロンドの乱の中心人物のひとりであったポール・ド・ゴンディ（のちのレ枢機卿）による文書であっても1654年以降のものはマザリナード文書ではない⁴³⁾。一方、モローはフロンドの乱の残響として、ポール・ド・ゴンディのそれ以降の文書も書誌に加えている。

次にキャリエはフロンドの乱の、とりわけ当時の世論に関わる文書であることを条件にしているのだが、そもそも17世紀に「世論」と言えるものがあつたかどうかを問題とする立場がある。ジュオーのようにマザリナード文書は民衆煽動的な側面もあるので、自発的な世論の表出とは認めら

42) Carrier, *La Conquête de l'opinion*, pp. 60-69.

43) 1654年以降出版の文書をモローのカタログで見ると、おそらく半分近くがレ枢機卿に関連する。特に1660年に出版された *À tous les évêques, prêtres et enfants de l'Église* には「〈フロンドの乱〉の最後の反響」(« le dernier retentissement de la Fronde ») という註釈がつけられている。つまり、モローによればこれが時間的には最後のマザリナード文書になるということになる。Moreau, *op. cit.*, t. III, pp. 384-386. しかし、キャリエにしたがえば、これはマザリナード文書ではないということになる。

れないという意見もあるのだ⁴⁴⁾。

マザリナード文書の定義に至るにはまだ考証が必要だ。私たちはモロー、ダルトワ、キャリエの書誌学の仕事を引き継ぎつつ、この定義の問題に取り組んでいくべきだと考える。

問題の所在と解決に向けて

「何をもって私たちはそれをマザリナード文書と呼ぶのか」ということを考える前に、この資料体をめぐる基本的な問題としてつぎの3点を確認しておく必要がある。

1. マザリナード文書の定義については議論の余地がある。
2. 現在「マザリナード文書」として扱われているものは、歴史的に「マザリナード文書と呼ばれているもの」である。
3. 各コレクションは「マザリナード文書と呼ばれているものの集合」である。

ここから、定義に到達するために、私たちのプロジェクトでは「マザリナードと呼ばれている文書」をすべて集め、デジタル化したのち公開し、議論の「場」を用意したいと考える。つまり「真正のマザリナードであるか」どうかという議論をひとまずおいて、ありのままの状態を仮想空間にもっていくのである。

44) Jouhaud, *op. cit.*, pp. 37-38. これに対してキャリエは後半のフロンドは確かに組織されたプロパガンダが多いが、とりわけ前半のマザリナード文書には世論の自発的反映を否定する要素はないと反論する。またエレヌ・ドゥチーニの仕事に依拠しつつ、17世紀にはすでに世論 *opinion publique* の概念があったのは明らかだという立場をとる。Carrier, *Le Labyrinthe de l'État, Essai sur le débat politique en France au temps de la Fronde (1648-1653)*, Paris, Honoré Champion, 2004, p. 14.

具体的手順としては、すでにデジタル化が終わった東京大学コレクション『マザリナード集成』約2700点を核として、モローのカタログに記載されている文書をすべて集めることから始める。これが第一段階である。

東京大学コレクションは5つの下位コレクションによって成立しているので、なかには重複している文書もある。モローのカタログをもとにしたコンコルダンスはすでに作成してあるので、そこに欠けているナンバーを補っていく。たとえば、提携先のボルドー市立図書館から早くも1000点のデジタル画像化した文書が送られてきているので、そこから必要なものを「加える」。もうひとつの方法としては、他の図書館で公開されている文書とリンクで「つなげる」ことも可能である。

モローの書誌のナンバーが全部そろったならば、さらにファン・デル・ハーゲン、エミール・ソカール、エルネスト・ラバディによる補遺にある文書を加えていく⁴⁵⁾。インターネットを使えば、すべての「マザリナード文書とよばれるもの」を集めることは不可能ではないのである。

こうして「加える」「つなげる」ことにより、私たちはモロー、ダルトワ、キャリエによって準備されてきた「総合目録」に近づき、さらにそれを超えることになるだろう。「真正のマザリナード」の条件を考えるために、「マザリナード文書と呼ばれるものの総体」を俯瞰する日がくる。私たちのWebサイトを議論の場として、研究者間の交流が盛んになれば、「何をもって私たちはそれをマザリナード文書と呼ぶのか」という問いの答えに到達することもできるだろう。そのときまで、たとえ一見料理のレシピにしか見えないタイトルであっても⁴⁶⁾、あるいはふたつの頭をもつ

45) 註30参照。

46) *LE POVLET* (現代語 *Le Poulet*、『鶏料理』)、*LA SAVCE DV POVLET* (現代語 *La Sauce du poulet*、『鶏料理のソース』)、*SALADE EN RESPONCE A LA SAVCE DV POVLET* (現代語 *Salade en réponse à la sauce du poulet*、『鶏料理のソースに対する答えとしてのサラダ』) この3点はすべて関連するマザリナード文書でモローの書誌にも載っている。東京大学『マザリナード集成』にもある。キャリエもこれをマザリナード文書とすることに異論はない。

女の赤ん坊が生まれたという驚異⁴⁷⁾を伝えるものであっても、排除することなく、コーパスに加えていくことになろう。なぜなら、電子媒体であれば「何をもって私たちはそれをマザリナード文書と呼ぶのか」という条件が明確になった時点で、その条件で検索すれば「真正のマザリナード文書の集合」を抽出し表示するのに数秒と時間はかからないからである。

47) *RELATION VERITABLE DE LA NAISSANCE D'UNE FILLE MONSTRUEUSE*…
(現代語 *Relation véritable de la naissance d'une fille monstrueuse*…、『怪物的少女の誕生に関する真実の報告書…』) 内容はある村で頭のふたつある赤ん坊が生まれたことの驚きを伝えるのみである。キャリエの鑑定ではマザリナード文書ではない。東京大学『マザリナード集成』に含まれ、モローの書誌には記載されていない。しかし、1649年に出版されたこの文書が内乱で疲弊したバリの民衆の「気分」と通じるところがないと言えるかどうかは、今後の検証による。今回のシンポジウムの発表者であるボルドー大学のミリアム・ツィンビディが以下の論文で用いる《*emblématique*》という概念を用いれば、あるいは新たな発見があるかもしれない。Myriam Tsimbidy, « Les mazarinades: récit d'événement et fiction littéraire » in *Eidôlon*, no 116: « Écritures de l'événement: les Mazarinades bordelaises », Bordeaux, Presse universitaire de Bordeaux, 2015, pp. 31-32.